

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：31106

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：H22 ～ H23

課題番号：22830012

研究課題名（和文） 開発のための経営学の理論構築—貧困者のアプローチを中心に

研究課題名（英文） Theory construction on business for development with the focus on the approach of poor people

研究代表者

NGUYEN CHI NGHIA（グエン・チ・ギア）

青森中央学院大学・地域マネジメント研究所・研究員

研究者番号：80588616

研究成果の概要（和文）：

貧困者が認識・対話・土着化したイノベーションによる創造的な解決案の策定・貧困削減に向けたソリューションの活用という一連の行動・行為を通して貧困問題を解決していくプロセスが重要な貧困削減の枠組みのひとつである。また、貧困者の活動が小規模で始められるのがほとんどであり、より効果的に貧困問題を解決するとともに、より多くの貧困者のために活動を拡大させることができるのかという質量両面のスケーリングが大変重要な課題である。

研究成果の概要（英文）：

The process, in which poor people deal with poverty issues through such steps of awareness, dialogue, formulation of creative solutions and activation of solutions towards poverty problems, can be considered an effective framework for poverty alleviation. Since these activities often get started with small scales, scaling up these activities widely and deeply is a very important task for future research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,240,000	372,000	1,612,000
2011 年度	1,140,000	342,000	1,482,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,380,000	714,000	3,094,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経営学・経営戦略

キーワード：経営学的アプローチによる貧困削減研究、貧困者の能動的・主体的行動、理論構築

1. 研究開始当初の背景

現在、貧困が世界中、特に発展途上国において深刻な広がりを見せている。2000 年から 2015 年までに「極度の貧困と飢餓の撲滅」や「普遍的初等教育の達成」等を目指すミレニアム開発目標（Millennium Development

Goals、略称 MDGs）の達成状況がかんばしくないなか、2006 年にノーベル平和賞を受賞したグラミン・バンクの事例や所得階層を構成する経済ピラミッドの底辺にいる 40 億人の貧困層を「Bottom of the Pyramid、略称 BOP」という概念で捉え、民間企業の活動が貧困層

の生活を一変させる有力なアプローチであると強調する S.L. Hart と C.K. Prahalad の研究を起爆剤として、貧困削減に対する経営学的手法が研究者・実務家・政策立案者から注目されるようになった。

2. 研究の目的

本研究は経営学的手法でいかに貧困を撲滅させることができるのかという問題意識のもと、主に次の3点を明らかにすることを目的とする。

(1) 開発のための経営学は現在世界的な注目を集めているが、研究の初期段階にあるために、貧困の捉え方、さらに、研究方法について、統一した見解が存在しているわけではない。本研究では、まず貧困削減に対する経営学的手法を巡り研究者の間に、多様な論争がなされているため、既存の研究を整理する。

(2) 経営学の理論でいかに貧困を撲滅させることができるのかを論じることである。発展途上国において、従来の「援助」を中心とした方法ではなく、貧困者の「自立」や貧困課題に応じた創造的な対応により貧困削減プロセスを促すという方法で解決する経営学的手法、特に貧困者のアプローチに注目した開発のための経営学に関する理論を提唱することである。

(3) 貧困者と他の貧困削減のプレーヤーとの連携戦略を構築することである。近年、多国籍企業は、先進国、新興国だけではなく、途上国の農村地域、スラム街など、世界の隅々に活動範囲を拡張させ、貧困層を商品やサービスを購入する巨大市場として捉えようとしている。また、多くの国際協力組織も、新たなフロンティア型の国際協力事業として、積極的に貧困層向けの各種商品・サービス提供等を行う貧困ビジネスと協力して、自らの国際協力の本業を發揮しようとしている。本研究で提唱する貧困者のアプローチはこれらの既存のアプローチとどのような共通点や相違点があるのか、また、各プレーヤーの持っている強みを發揮できるような連携図をいかに実現するかを解明する。

3. 研究の方法

これまで多くの研究方法論を提唱する、または、応用する研究者は自らの注目する理論を構築・検証するために、主観的にデータを収集し、最後に何らかの枠組みでその理論が語る現実を捉えようとする、いわば、理論とデータとのフィット (data-theory fit)

を求める方法論を採用することが多いである。こういう研究方法はそのもの自体が間違っているわけではないが、データが研究者の目指す理論構築や理論検証のために主観的に手段として駆使されているため、実証的データは客観的な現実のバリデータとしての本来の役割が機能できなく、結局、その研究は現実をその未熟な枠組みやパターンでむりあり捉えようとするものとなり、その理論の妥当性および研究の厳密性・科学性も問われてしまう。

本研究は経営学的手法による貧困削減研究の先行研究のサーベイを行い、貧困者の自立活動やイノベーションによる自らの課題解決を調査・分析する。単に事例を適当に紹介し、その事例から理論を抽出するのではなく、本研究はこれまでの社会科学における定性的研究と理論構築の方法論を深く研究し、調査結果に参照しながら、本研究に適したリサーチデザインや理論構築の作業を正確に設定したうえで、研究活動を進める。最後に、貧困削減における貧困者のアプローチの理論を提唱する。

4. 研究成果

(1) 既存の研究の整理

(ア) 先行研究は貧困者を様々な視点や角度でみているが、どのように順序付けを行い、どのように実行していくことで、世界全体としての貧困の削減につながるのかという可能性や見通しはまだ不明である。貧困者の消費や生産の側面に注目すべきと既存の研究では強調されているが、本当に貧困者は貧困の悪循環を打開して貧困から脱却していくことができるのか、また、イノベーションを起こすことは重要ではあるが、そのモデルを貧困者の間で波及させていくための戦略がスピーディに貧困層のなかで複製されていくための戦略についてはまだ疑問が残る。既存のアプローチの再現性およびその効果はそのものの構成概念と内的妥当性に限られてしまう。

一方、近年、社会問題を解決する、または社会変化を引き起こす現象として、ソーシャル・アントレプレナーシップも世界的に研究者・実務家・政策立案家などからの注目を集めているが、そのコンセプトについて統一した見解は未だ少なく、既存の研究はそのアプローチがどのように貧困を撲滅させるのかということよりも、未だその現象を解明しようとするにとどまっている。また、他方、多様な臨床設定 (clinical setting) への応用を目的とし、人間の日常生活における課題解決を研究するという『人間の問題解決の理論 (Theory of Human Problem

Solving)』のなかでも指摘されたように、人間はその問題を自らの課題と認め、その課題の解決に取り組んでいかない限り、いくら良い課題解決の方法があっても、その課題が解決できない。これらの理論は、既存の貧困削減研究でも未だ開示されていない貧困課題の解決のプロセスについて多くの示唆を与えるが、「貧困の悪循環に捕えられている貧困者」という特別な研究対象にあてはまり、その理論を検証し、発展させる研究は未だされていない。

(イ) 経済成長のもとで取り残されていく貧困者は、既存の経営学的手法では受動的な存在と捉え、貧困者を農村地域における企業の販売員や貧困層の市場の調査員等という形で新しい労働力として活用され、または、社会問題に対する企業の社会的責任が問われるなか、社会からの反発を和らげるために企業にムリアリ受け入れられることが良く見られる。

そのなかで、本研究は貧困者を受動的な受益者と捉えるのではなく、貧困の悪循環を自ら打開してそこから脱却する主体的・能動的なプレーヤーとみることの重要性を指摘した。

注) この図は経営学的方法による貧困削減研究における貧困者のアプローチに着目した本研究(A)の主張を示す。

		貧困撲滅の可能性	
		高い	低い
貧困者の関与	高い	A ・貧困者によるソーシャルビジネス (Prof. Muhammad Yunus) ・貧困者の自立活動	B ・貧困者の生産性の向上 (Kamraniなど)
	低い	C ・現象説明研究：ソーシャルアントレプレナーシップなど ・人間の課題解決理論 (Theory of Human Problem Solving)	D ・貧困層開拓ビジネス (Prahald, Hartなど)

(2) 貧困者のアプローチ

これまでの研究の理論をベトナムの障がい者の事例と他の貧困者の対象で検証し、修正した結果として、貧困者が貧困課題を解決していくプロセスを認識・対話・土着化したイノベーションによる創造的な解決案の策定・貧困削減に向けたソリューションの活用という一連の行動・行為で捉えることができる。このプロセスは具体的に下記のとおりです。

+認識：貧困者は自らが直面している課題に対する危機感(家族の負担になる、または、家族を貧困に巻き込むこと)や課題を乗り越え、平穏な生活を送り、自らの人生を作っていくという要望を持つことによって課

題を解決する必要性に対する認識を持つようになる。

+対話：イノベーション創出の機会の源泉といわれるこの意識転換のもとで、貧困者は自らを取り巻く問題点との対話を繰り返し、従来の課題解決方法の限界を認知し、創造的に課題を解決できるイノベーションを引き起こすための機会を発見する。

+土着化したイノベーションによる創造的な解決案の策定：貧困者の資源(貧困状況に対する理解、集団的な潜在性等)を発掘・活用し、状況に即した創造的な解決案を策定・創造していく。従来の製品価値を破壊し、新しい産業の創出を導出する破壊的イノベーションと違い、貧困者の創造的な解決案はあくまでも従来の方法の限界を克服するものであり、かつ、より効果的に貧困者の課題を解決するために創出されるものではある。いわば、個々の貧困状況に創造的に対応する土着化したイノベーションである。

+貧困削減に向けたソリューションの活用：これらの創造的な解決案は貧困削減に対する意識のもとで各抑圧を破壊していくことに活用されていく。そして、このプロセスが単なる1つのイノベーションを創造することだけで課題を解決することができるとは限らないため、場合によっては一連のイノベーションを多面的に創造していくことを通じて悪循環を打開するまで繰り返されていく。

このプロセスと、個々の貧困対象のプロセスの各段階を配慮した他の貧困削減プレーヤーの支援・取り組みが貧困者の労働・努力をベースとする重要な貧困削減の枠組みのひとつであることを指摘した。貧困者の活動が、急激な経済成長の中で取り残されていく地域、農村部で小規模で始められるのがほとんどであり、より効果的に貧困問題を解決するとともに、より多くの貧困者のために活動を拡大させることができるのかという質量両面のスケールアップが大変重要な課題である。

(3) 貧困者と他の貧困削減のプレーヤーとの連携戦略

貧困者の自立活動は小規模で行われているのがほとんどであるため、その活動を継続・拡大させていくには、貧困者自身だけでは限界がある。しかし、どの貧困者も貧困削減に対する意識を持ち、課題解決の方向に向けて働いたり、解決案を模索したりするとは限らない。だから、貧困者の取り組みの限界と企業や非営利組織の貧困層へのアプローチに関わる課題が貧困者と貧困削減に向け

て活動していく他のプレーヤーとの連携の必要性を強めている。

本研究は政府、多国籍企業や非営利組織が、単に貧困者に雇用機会を与えたり、商品やサービスを提供したりするというやり方よりも、むしろ、貧困者の主体的行動・行為を重視しながら、個々の貧困対象者が貧困課題を解決していくプロセスおよびプロセスの各段階における課題を配慮し、自らの資源・強みを発揮した対応・支援を検討すべきことを指摘する。

例えば、①貧困者が零細企業の経営者である場合は、貧困削減に対する意識、危機感のもとで、自らの労働力を発揮しながら、自らの事業で生計を立て生活していくため、課題に即した対応（例えば、貧困者が自立していくための共助基金の構築や貧困者のビジネスとの連携など）が求められている。

②貧困者が労働者や将来の労働者である場合、労働意欲・貧困脱却の意識が低い労働者を奨励し、意識を向上させることが重要である。または、意識があっても、必要に応じて貧困の特徴に合った職場や生産の仕組みの創造等も必要である。

③貧困者が消費者である場合は、単なる商品やサービスを提供するのではなく、その商品・サービスの使用を貧困削減や課題解決に方向づけたりすることも必要である。

開発のための経営学研究は既存の経営学の理論基盤から切り離された分野ではなく、既存の経営学理論を単に応用する領域でもない。むしろ開発という視点でいかに貧困削減の撲滅や開発の課題という視点を達成することができるのかを追求することにより、経営学が更に発展し、経営学研究の新しいフロンティアの1つともいえる開発のための経営学研究が台頭している。貧困削減に関する経営学研究、特に本研究が注目する貧困者や社会問題の当事者の主体的行動を起点とする経営学的アプローチは研究の初期段階にあり、残された課題は山積みされているが、より効果的な貧困削減の取り組みを道づけることで、貧困削減に対して重要な貢献となることが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① Nguyen Chi Nghia、求められる『経営』と『労働』の論理—発展に向かうベトナムの現状から考える、月刊経営労働、査読なし、6月号、2010、8-13。

〔学会発表〕(計2件)

- ① Nguyen Chi Nghia、東北地域におけるソーシャルビジネスの研究—実践的な試みからの理論的示唆、実践経営学会第11回東北支部会、2011年11月26日(岩手県北上市)
- ② Nguyen Chi Nghia、貧困削減の経営学的アプローチにおける貧困問題解決のプロセスモデルの構築—人間の問題解決理論を用いて、実践経営学会第10回東北支部会、2010年11月27日(岩手県北上市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

NGUYEN CHI NGHIA (ゲン・チ・ギア)
青森中央学院大学・地域マネジメント研究所・研究員
研究者番号：80588616

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：